

概要報告

実施期日	7月29日(火) 【午後】
部会名	小学校 社会部会

テーマ 『資料から子ども自らが問題を見出し、解決していく社会科を目指して』
「安全なくらしとまちづくり」～事故・事件のないまちをめざして～

提案概要

○資料から子どもが問題を見出し、解決していく過程を、「A疑問を見出す」「B疑問から学習課題を見出す」「C学習課題について考える」「D学習課題解決に向けて具体的な行動をとる」という4つのステージとして整理し、それをもとに授業をすすめた。

○資料から子どもが、より多く、より質の高い「なぜだろう」を見出すために、自分で思考する時間を保証した。また、それをアウトプットしやすいよう、発言を否定されない雰囲気づくりを大切にした。さらに、それでも発言できない子どものために、付箋に書く作業や小グループでの交流を取り入れた。

○さまざまな「なぜだろう」をクラス全体で共有し、児童が自ら解決できそうなものを整理し、その場で解決できない「なぜだろう」を学習課題とした。その際、児童が自分のこととして問題意識が持てるように、学区内で発生した交通事故件数をグラフ化したものを使った。

○学習課題を解決するために、今回は安全マップ作りを行った。マップを作る過程で、事故の起こりやすい危険箇所を自分の目で確かめ、なぜ危険なのかを考えることによって、危険な場所について知識を一般化した。

○最後に、個人としてこれからできることを考えさせたことにより、一人ひとりが自分のこととしてとらえ、ポスター・チラシ・年下への声掛け等それぞれができることに取り組む姿が見られた。

質疑概要

Q 学習の形態は、すべて学年合同で行ったのか。

A 授業参観での発表は学年で行ったが、それまでの取り組みはクラスごとに行った。

Q 学習のまとめは、どのように活用されたのか。

A 校内に作成した安全マップを掲示したり、ポスターを町内に掲示させたりした。

Q マップづくりにおける指導はどのように行ったのか。

A マップの下調べは、放課後に行った。(保護者に事前に連絡した) グーグルマップをプリントアウトしたものを参考に、児童は地図作りを行った。

研究協議概要

① 提示資料について

教科書の写真から、身近な事故のデータへ移行させ、児童の身近な世界にもっていったことがよかった。寒川町の交通事故件数と、学区の交通事故件数での比較をした資料で、身近な学区のことを扱ったことにより良い学びになったと思う。

② 4つのステージについて

「なぜだろう」という視点は、社会科だけでなくさまざまな教科に生かせる視点だったと思う。子どもの気づきから展開されているので、子どもの意欲を持続させることにつながった。数多くの子どもの気づきのまとめ方であるが、意見の拡散しすぎを防ぐには、子どもたちにある程度視点を与えることが有効であると考えられる。また、場合によっては収束しなくてもよい場面もある。地域の方の努力や、子どもたちの安全を見守って下さる方に視点をおいてもよかったのではないかと考えた。

(提案者) 本実践では、最終的に一つの疑問にまとめてしまったが、個々の疑問と集団の疑問に並行して取り組むことができるように、個々の児童の支援をしていきたい。

③ 安全マップ作りと活用について

地図にまとめて可視化することで、学習内容がより身に付く活動だったと感じた。また、「なぜここが危

険なのか」ということを子ども自身が考えるきっかけとなった。ただ、完成した安全マップを用いて町役場に提案したり、道路に子どもの描いたポスターを貼ったりすることもできるのではないかと考えた。

④ その他

将来、社会に参画していく子どもたちという視点も大切だと感じた。

まとめ概要

- 中学年の社会科は直接体験できる学習であり、身近な課題が設定できる。社会参画への第一歩である、「安全マップづくり」を子どもが体験することができたのはよかったが、さらに広げることができたらなおよかった。地域の人々の目につくようにすることができたら、さらに意欲が高まり、社会参画にもつながっていったのではないかと。
- 子どもの疑問や思考を「見える化」していくことが大切である。また、中学年の学習は「学習方法を学習する時期」ととらえることもできる。この視点をもつと、教師がどのような課題が子どもたちに必要なのかということを精査することができる。
- 今回のテーマは、今子どもたちに求められている内容であった。本実践では、4つのステージをスパイラルでまわっていくということを意識することで子どもの学びが成立するという提案であった。「なぜだろう」をスタートとした本実践は、言語活動が数多く取り入れられた実践であった。言語活動が重視されるあまり、話し合うことを強要される授業場面を目にする昨今であるが、本日の協議の中でも話し合いの必要性については話題になっていた。
- 授業の型が本実践ではたくさん使われている。たとえば、話型のような話をする時のひな形や、結論と理由をセットで話すようにという指示、聞いたときの反応の仕方の指導があった。「なぜだろう」を考えさせることも型の一つである。適切な型を提示することで、子どもが安心して活動できる。しかし、型をなぞるだけになってはならない。